

久米村孔子廟創建の歴史的意義：十七世紀後半の政治的視点から

伊藤, 陽寿

---

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究 / 沖縄文化研究

(巻 / Volume)

36

(開始ページ / Start Page)

101

(終了ページ / End Page)

135

(発行年 / Year)

2010-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007271>

## 久米村孔子廟創建の歴史的意義

— 十七世紀後半の政治史的視点から —

伊藤陽寿

はじめに

孔子廟とは、その名の通り儒学の祖である孔子を祀った廟である。これは、一般的には「至聖廟」と称される場合もある。琉球では戦前まで、孔子廟が久米村<sup>①</sup>と首里<sup>②</sup>の二箇所<sup>③</sup>に存在した。本稿では、このうちの前者、すなわち久米村孔子廟の創建について言及を行う。

久米村孔子廟についての従来の研究は、主に琉球における儒学の振興や儒教イデオロギーの表出<sup>④</sup>、それを主として担った程順則に関連させたものが中心であった<sup>⑤</sup>。さらに久米村漢学の発展史という形でも、これらが論じられてきたと言えるだろう<sup>⑥</sup>。これより久米村孔子廟の創建は、従来は久米村史の

一項目として、または当代期のいわゆる琉球「中国化」の一環として位置づけられてきたと言うことができる。

従来から、十七世紀の後半から十八世紀の初頭は、国家政策として久米村の儒教や中国的規範の拡充が推進されると同時に、近世琉球への体制の変化を余儀なくされた時期として注目されている。<sup>6)</sup>しかし、ではなぜこの時期に、「中国化」や儒学の振興を推進する必要があったのだろうか。

また一方で、孔子廟創建の時期は、羽地朝秀の改革期に当たっていることも見逃してはならないだろう。<sup>7)</sup>なぜなら、羽地改革の通説に従えば、改革の大きな目的のひとつは、大規模な経済改革にあつたとされるからである。この経済改革の中には、礼制の簡素化や合理化という項目が存在し、これらが厳しく取り締まられていたことがわかる。<sup>8)</sup>このことに即してみると、孔子廟がこの時期に創建されるというのは、理由なくしてはいささか不自然ではあるまいか。

本稿ではこれらを踏まえ、孔子廟創建時に琉球を取り巻いていた政情や中国（清朝）との国際関係といった視点から、孔子廟創建の意義を、さらに創建された孔子廟がその後の琉球にどのような影響を及ぼしたのかを考察していく。

## 一 孔子廟創建まで

### (1) 創建請願

久米村孔子廟の創建について、『金氏家譜』の「八世紫金大夫諱正春」には次のようにある。

康熙十年辛亥。新たに聖廟を建てることを、国王に請願した。こうして、この請願が許可され、場所を泉崎の橋頭に占って決定し、聖廟が建てられた。<sup>9)</sup>

この史料から、康熙十年（一六七一年）に、金正春という人物が初めて久米村に孔子廟を創建する旨を申し出たことがわかる。

では、金正春はなぜ孔子廟の請願を申し出たのであろうか。金正春によると、次のような出来事が、創建の契機になったという。

万曆三十八年庚戌の、総理唐栄司の蔡堅喜友名親方が朝貢した際に、孔子廟に登り車服や礼器を見て心を動かされた。こうして、聖像を描いて帰国した。その後、毎年春秋二仲上丁の時期には、唐栄の士大夫が家ごとに交替でこれを祀った。このように由来は久しいが、しかしいまだに立廟には至っていない。<sup>10)</sup>

これによると、万曆三十八年（一六一〇年）に、久米村の蔡堅が孔子像の絵を琉球に持ち帰り、久米村士族たちが交替で祀っていた。しかし廟が創建されていないために、このたび創建を請願したので

というのである。

この一連の筋書きは、琉球の正史の中で定説として記載されている内容であり、広く知られているものである。しかしこの内容だけでは、金正春による創建の意図も、王府側の請願許可の意図も理解できない。そこでまず、金正春による創建の意図を探るために彼の人物像に迫ってみることにする。

## (2) 請願者 金正春

金正春は、一六一八年に生まれた久米村人<sup>1)</sup>である。彼は進貢使として中国大陆に数回渡海するが、この間に中国大陆において特筆すべき経験をしている。それが、中国における明清王朝交替である。

金正春は一六四六年に、当時福州に誕生した南明政権に朝貢に訪れた。南明政権は、李自成や清軍によって北京を追われた明朝の遺臣達が、北京の勢力に対抗し、明朝の再興をはかるために樹立した政権である。彼はこの福州南明政権の隆武帝を慶賀するために中国を訪れたのである。<sup>2)</sup>

金正春は、福州にて南明政権を慶賀し南明への朝貢を誓うが、程なくしてこの政権は清軍の攻撃によって滅亡してしまう。南明政権が滅亡した際に、彼はまだ福州に留まっていたため、南明政権を滅ぼした清軍に捕まり北京へ連行された。そして北京に着くと、清朝皇帝の順治帝に謁見させられ、清朝に忠誠を誓うよう申し渡されるのである。<sup>3)</sup>

清朝に忠誠を誓った金正春一行は、琉球国王へ清朝の誕生と投誠を言い渡す使者である謝必振を引

き連れ、琉球に帰国しようとする。しかし、明清交替の動乱のただ中にある中国大陸の旅は、非常に険しいものであった。<sup>14)</sup>

ようやくのことで福州に辿り着いた一行は、程なくして福州から渡海するが、嵐によって船が漂流し、そのまま薩摩に漂着する。<sup>15)</sup>その後、彼らは薩摩の命により、二手に分かれて旅をすることになった。一方は、謝必振と共に琉球に帰国し、もう一方は、中国の動乱の情報を將軍に伝えるために江戸に向かったのである。謝必振はそのまますぐに琉球へ向かったが、金正春は、後者のグループの代表として江戸に向かい、中国の動乱を將軍に伝えた後で琉球に帰国した。<sup>16)</sup>

帰国後、金正春は順治十一年（一六五四年）に、久米村の代表的存在である総理唐栄司の役職に就く。彼は就任後も、経学、すなわち儒学を久米村の子弟に教え、人材の育成に励んだ。その結果、金正春によって久米村の礼学や文章が中国と同じようになったと、彼の子孫達は彼を賞賛している。<sup>17)</sup>

ここから、金正春の人物像について二つのことがわかるであろう。一つは、彼は明清交替期の中国や、同時期に東アジア情勢を模索していた日本といった、琉球を取り巻く二大国を直に知る人物であるということ。そして二つには、儒学を教え、人材の育成に励んだ人物であったということである。

また、金正春による孔子廟創建の請願の後、創建について直接携わった人物達も、金正春と同じく「中国」と何らかの関係があった人々であったということをご指摘しておきたい。<sup>18)</sup>

以上から、久米村の孔子廟は「中国」での経験を有する久米村人達によって、金正春の請願の三年

後の康熙十三年（一六七四年）に創建されたのである。<sup>19)</sup>

## 二 羽地朝秀と孔子廟の創建

### (1) 羽地朝秀の改革

では、孔子廟が創建された一六七〇年代前半とは、琉球国内においてどのような時代であったのだろうか。

広く知られるように、十七世紀後半の琉球では、羽地朝秀による大規模な改革が行なわれた。この改革は、具体的には一六六六年から一六七三年の間（康熙五〇―五十二年）、すなわち羽地朝秀が王府最高職である摂政の任に就いている時に行われたものである。

改革の内容についてはすでに多くの研究成果が存在する。<sup>20)</sup> その中での改革の評価は概ね、琉球の制度を改変し、新たな国家体制に作り変えたということとで一致している。先行研究による改革の研究は、主に「羽地仕置」という史料を用いたものが中心となつている。この羽地改革の基本史料とされる「羽地仕置」には多くの改革の内容が記されているが、それを大別すると、改革が、大規模な政治組織や経済の合理化、冗費の排除<sup>21)</sup> というように、財政改革を念頭に置いた制度の刷新を行なおうとしていたものであることがわかる。つまり「羽地仕置」は、当時危機的な経済状態にあった琉球の、具体的な

「改革の様子を示した史料であると言える。

## (2) 創建前後の経済状況

では、創建前後の時代、すなわち一六七一年から一六七四年頃の琉球の経済状況について、「羽地仕置」を用いて具体的に見ていこう。

当時の経済状況を物語る記述に次のようなものがある。

色々吟味して政策を行なったので、人々の生活は、二・三年のうちにどんどん楽になっていった。

これは、私ひとりの私言ではなく、皆が見て知っていることである。前々（の経済危機的な状態と今）とは全く違うのである。<sup>(23)</sup>

これは、一六七三年の口上覚である。ここから、この史料で言及している「二・三年のうち」というのは、大体一六七〇年頃を指していることがわかる。

では、ここで言及されている一六七〇年頃に羽地が行なった改革とは、一体何であろうか。それは、一六六九年に布達された史料に記されている。

この度、大和に仕明を許してもらえよう訴えたところ、異議なしと返答を戴き、仕明をお許し  
いただいた。<sup>(24)</sup>

ここで示される「仕明」とは、土地の開墾のことである。<sup>(24)</sup>つまりこの時、羽地朝秀が行なった開墾が

功を奏し、琉球経済の回復に大きく寄与したのである。これは、数年の間に琉球経済を窮地から救ったということからも窺い知れるであろう。

このことから、孔子廟創建の請願があった一六七一年頃は、琉球経済回復の過渡期に当たる時期で、孔子廟創建の実施は、琉球経済回復の表れであると言えるだろう。

こうした背景の下で、羽地朝秀は、金正春による孔子廟創建の請願を許可し創建に踏み切った<sup>25</sup>。では、創建の費用については、王国がすべて負担したのであるか。創建の費用については次の史料が示している。

一、大清康熙十年辛亥、紫金大夫金正春（城間親方）孔子廟建立の願を以て国相向象賢羽地王子（中略）に請て先王尚貞様御前に啓奏し、王子尚純公及諸王子按司親方部庶士に至まで、皆勸進を乞て廟を造営す。大約鳩目錢四千貫余を聚む。其外、費用作料等は、皆公儀より出づ。<sup>26</sup>

これらから、創建費は当初から公費を使ったのではなく、最初は王族や士族達の勸進で賄われ、さらにそれに公費が補われたということがわかる。これは、王国経済が回復傾向にあったとしても、まだ公費で全てを賄いきれるわけではなく、個人による出資に期待せざるを得なかったからであろう。<sup>27</sup>

さて、ではここで再度羽地改革の性格について立ち返ってみよう。羽地改革の大きな眼目の一つとして、礼制の改革というものが存在する。これは、華美な葬礼を禁止し冗費を省くというものである。羽地朝秀は改革の中で、この項目に対して、並々ならぬ心血を注ぐのであるが、ではなぜこうした礼

制の改革が実施される中で、孔子廟は創建されたのであろうか。

残念ながら「羽地仕置」の中には、孔子廟創建に関する記述は全く存在しないため、この史料を用いた創建についての言及は難しい。ただ、「羽地仕置」は羽地による布達文書の一部を集めたものであるという性格から、また、孔子廟は経済や礼制の改革のただ中にあるにも関わらず、多少なりとも公費を使つて創建されたという点から、創建が羽地改革の一環であつたと捉える事は可能ではなからうか。

### (3) 「御例格」に応じる

では次に、当時の薩摩と琉球の関係の面から、孔子廟創建の意図を探つていこう。

前述した羽地改革の意義は、経済改革の他にも存在した。それは、薩摩や中国との国家間関係の整合化である。

このことについて、豊見山和行氏は「改革の特徴は、当時の東アジアの政治理念である儒教イデオロギーにもとづく統治形態の萌芽であると同時に日本の近世社会との整合化」であり、また「儒教イデオロギーによる王国の再編は、農村支配の強化と同時に、中国の徳化の及ぶ国であることを、対外的に表明する手段」であると、端的に述べている。<sup>29</sup>この点について、後世の羽地の子孫達による羽地朝秀の評価を記述した史料の中では、

鹿兒島の「御例格」に応じ、国法や礼法を定め、琉球における政道の根元を定めた。<sup>30)</sup> という言葉で記されている。

では具体的に、この「御例格」に應じるとはどういうことであろうか。これについては、大きく分けて二つあると考えられる。

一つは、政治や税制を介した薩摩との関係の構築、すなわち琉球における政治や経済の面で、薩摩による関与が前提となる体制を作るために国内改革を行ない、それまでの琉球の体制を作り変えるということである。薩摩関与が前提となるというのは、仕明等を行う際は必ず薩摩の許可が必要だったというように、政策決定は薩摩の許可無しには成し得なかったという点から窺うことができる。

二つには、琉日関係の隠蔽政策が考えられる。この隠蔽政策については、その開始や完成の時期、薩摩・琉球両者における政策の論理や目的など、細かい点においては諸説があり一定しないところがあるが、<sup>31)</sup> おおよそその見解として次のようにまとめることができるだろう。

一六〇九年の薩摩の琉球侵攻後、幕府・薩摩は、琉球が中国（明朝）との冊封・朝貢関係を継続できよう、琉球を占領するのではなく従来通り「琉球王国」として存続させた。さらに琉球の口を使つて、琉球は薩摩の属国ではなく、あくまでも「琉球王国」であるということを中国側にアピールさせ、薩摩と琉球の関係が支配・被支配の関係ではないことを強調しようとした。薩摩との現在の関係については、侵攻後、薩摩・琉球間で「距離」ができたとするに留まった。

一方、一六四四年に成立した清朝に対しては、薩摩・琉球間の交流は全く存在せず、お互いの存在すらも知らないとアピールし、完全にお互いの関係を隠そうとするのである。これは、清朝の軍事的脅威に対して取った政策で、清朝から初めて冊封使が派遣され、琉球国王を冊封した一六五〇年代頃を契機に、幕府が打ち出したものであるという。<sup>32)</sup> さらに、一六八三年来琉の冊封使一行に対しては、薩摩の役人をトカラ列島（七島）の一つである宝島の人であると詐称し、薩摩の役人と冊封使が対面することで、隠蔽政策が実現したとする。これはつまり、薩摩の役人を「宝島人」と詐称することで、琉球は専ら宝島人と交流するだけであって、日本と交流しているのではないということを清朝側に示したというレトリックである。<sup>33)</sup> その後隠蔽政策は、大体一七二〇年代、すなわち十八世紀の初め頃に一応の完成をみるという。

隠蔽政策の歴史と羽地の改革や孔子廟が創建された時期を重ねてみると、創建時期はまさに、隠蔽政策の推進期と重なることがわかるであろう。これにより、豊見山氏の言う「中国の徳化の及ぶ国」の表明は、一方で日本に対する隠蔽政策推進のアピールでもあった。すなわち、ここから中国による「徳化」の表明イコール琉球による薩摩の「御例格」に応じる行為であると考えることが可能であろう。

中国による「徳化」の体現、すなわち琉球の「中国化」を推進することが隠蔽政策を助長する手段だとすれば、一六七〇年代に行なわれた孔子廟創建に関わる一連の出来事は、羽地朝秀や金正春による琉球「中国化」の推進に他ならない。ではこの、薩摩の「御例格」に応じるための琉球「中国化」

の推進は、清朝側にはどのように映ったのだろうか。

### 三 冊封使汪楫の来琉

#### (1) 汪楫の使命

本節では、清朝側の視点を中心に論を進めていく。

康熙二十二年（一六八三年）、琉球国王尚貞冊封のため、汪楫・林麟焜をそれぞれ正副使とした冊封使が琉球に派遣された。しかし、この時の派遣に至るまでの経緯は一筋縄ではいかないものであった。今回の冊封は、二回目の琉球冊封なので、わざわざ使者を派遣する必要はないという議論が清朝内部で巻き起こった。<sup>34</sup>しかし最終的に康熙帝の判断により、琉球の更なる「徳化」を目指す目的で、康熙帝直筆の「中山世土」の扁額を汪楫一行に持たせ、冊封使を派遣することになったのである。康熙帝がなぜここまで琉球の「徳化」にこだわったかといえば、<sup>35</sup>彼はこの派遣決定以前に琉球の三藩の乱時の対応から、琉球は他の朝貢国の模範になるというような非常に好意的な印象を持っていたからである。同時に康熙帝には、中国大陆における三藩の乱や台湾鄭氏平定直後という世相を背景に、<sup>36</sup>琉球側の要求をのむことで自分たちの側に琉球を引き付けておきたいという思惑も存在したのかもしれない。

このように康熙二十二年の冊封使派遣は、中国大陸の当時の世相や康熙帝の琉球への好印象が幸いして、実現したものであったといえよう。<sup>(38)</sup>

## (2) 冊封使の「孔子」目撃

琉球に到着した汪楫一行は、到着の翌日、琉球人の通事为天妃宮と至聖廟への訪問を考えていることを知る。<sup>(39)</sup>しかし一行は、この時はまだ琉球に至聖廟が存在することを知らなかった。そのため、汪楫は至聖といつても、孔子ではなく、別の聖人が祀られているのではないかと考えた。そこで、至聖廟に到着した彼は、孔子の像を調べ孔子であると確認した後、改めて礼式のように参拝した。<sup>(40)</sup>しかし、なぜ琉球に孔子廟が存在するのか不思議に思い琉球人に尋ねると、康熙八年（一六六九年）に琉球の使者が清朝に朝貢した際に孔子廟を見て感動をおぼえ、その気持ちに従って康熙十一年に創建したと返答されたのである。<sup>(41)</sup>

ところが、琉球側のこの返答は、本来の孔子廟創建の請願の口実とは異なっている。なぜなら、前述したように、創建の口実になったのは万曆三十八年（一六一〇年）の入貢の時であるが、それに対し、こちらは康熙八年となっているからである。<sup>(42)</sup>

この康熙八年の出来事については、各氏の家譜にも、また実際にこの年に朝貢した使者の家譜にも、請願者の金正春のものにも、康熙八年に孔子廟の記述は見出せない。

このように、万曆三十八年の蔡堅の例と比べた時に、各家譜に孔子廟に関する記載が無いというのは不自然であるため、この「康熙八年」というのは、汪楫達冊封使に対する琉球側の口実であり、琉球人達は、孔子廟創建のきっかけに関して作・為・的・に事実を歪め、清代になってから創建の口実を得たとして冊封使に告げたものと考えられる。

その後、汪楫一行は、孔子廟以外に、首里城の王の間でも孔子を目撃する。王宮を訪れた一行は、王の間にかけられている絵に注目する。それは、汪楫等が持参した「中山世土」と書かれた扁額の下に掛けられていた、古ぼけた孔子像の絵であった。<sup>43</sup>これに関して、汪楫は特にコメントを残してはいないが、これらから、琉球において一行は、至聖廟と王の間の二箇所「孔子」を目撃したことがわかる。

### (3) 冊封使達による孔子廟の記述

琉球において「孔子」を目撃した汪楫と林麟焯は、琉球孔子廟についての文章を琉球で書き記している。<sup>45</sup>前述した「康熙八年」を示した史料が林麟焯のものであるが、<sup>46</sup>一方汪楫は、その文章を琉球に残しただけでなく、復命書である「冊封使録」にも同様の文章を収録している。林麟焯の文章については前に考察したので、ここでは汪楫の残した記録をみていくことにしたい。

この文章における要点は、次のように四点にまとめることができる。

① 州県（という末端）から（始まり）、皆が建学を志すようになることで、孔子の廟を祀ること

がはじめて天下に広がった。だから、学以外にはいわゆる廟というものは無いのである。孔子祭祀は、廟にて（儀式を）行ない、学にて（知識などを）備え、完成するのだ。<sup>47</sup>

② 今の天子（康熙帝）が、教化や学校（の建設）を常に考え、重んじているため、天子の徳が及ぶ範圍（朝貢国）でもその徳を受け、学を修め、孔子廟を作る（新しくする）することを急務と考えたのである。<sup>48</sup>

③ 琉球は海外の小国にも関わらず、明初の昔から朝貢国であつたせいか、清代になつてから朝貢国の中で初めて孔子廟を創建した。<sup>49</sup>

④ これは清朝の徳を琉球が蒙つた現れである。<sup>50</sup>

これらから読み取れることはそれぞれ、①廟と学（校）を表裏一体のものとして考えている。②孔子廟と康熙帝の徳化を結び付けている。③清代に入つてから、琉球は孔子廟を建てる事を急務と考え、朝貢国のなかで初めて孔子廟を建てたとしている。④これらはすべて清朝による琉球の徳化である、ということである。

この中で、特に③は注目すべきである。なぜなら、琉球が清代になつて初めて作つたとされる孔子廟、すなわち康熙十一年に創建された孔子廟の存在が、琉球が康熙帝の徳を受け入れ清朝の徳化を蒙つたことの現れであるという論理に、すり替えられて述べられているからである。このことは、逆に言えば、孔子廟が琉球における清朝の徳化を視覚化する「装置」として働き、冊封使に印象付けたということ

になるであろう。

こうして汪楫は、琉球孔子廟の存在により、清代になってから他の朝貢国よりもいち早く孔子廟を建てた琉球に対し、康熙帝が持つているのと同様の「他の朝貢国の模範」となる国であるという印象を持った。彼は康熙帝の影響により、来琉前から琉球に対しての良い印象を多少なりとも持っていたのかもしれない。しかし、孔子廟や「孔子」を目の当たりにした彼にとっては、もはや印象は確信に変わっていたのであろう。そして彼は、琉球のさらなる徳化を目指し琉球側にいくつかの提案をするのである。

#### (4) 汪楫の提案

孔子廟を見た汪楫は、琉球側に三つの提案をする。そのうちのまず一つ目は、学校の創建である。

廟はすでに完成している。この敷地を拡げて学校とすれば、費用はあまりかけずに礼制を備えることができるだろう。<sup>51</sup>

これは、前述したように廟と学校が一体であるという考えからなされたものであろう。

さらに二つ目には、このことに関連して、学校創建の前提になる提案をする。

廟を拡げて学校とし、国中の礼儀や学問に長けている者を選んで長とし、そしてその子弟たちを教育させ、積奠の礼を挙行させるようにする。(しかしもしその時に) 国の中で長の選択が難し

ければ、そのことを文章にしたためて、清朝に昔の教育のやり方にしてほしい旨を請願しなさい。<sup>52)</sup>

これは、もし指南役の選出が難しいようなら、昔の教育のやり方を行なうことを提案したものである。ここで言う昔の教育のやり方とは、明代に行なわれていた留学生制度のことを指している。この留学生は、琉球では官生と呼ばれ、北京の国子監に国費によつて留学を許された者たちである。この官生の派遣が一五七九年を最後に途絶えていたため、汪楫はこれを期に制度の復活を提案したのである。

制度の復活については、琉球側も汪楫の提案に乗り、制度復活を康熙帝に請願する文書をしたため、汪楫に渡した。そして汪楫は北京へ帰国した後、康熙帝にこの文書を渡した。汪楫からこの文書を受け取った康熙帝は、好意的に琉球の請願を許可したのである。

これについて上江洲安亨氏は、康熙帝による制度復活の許可は、琉球に好意的な印象を持つ、彼の撫恤政策の一環であるとしているが、<sup>53)</sup> 一方でこの撫恤政策とは、汪楫の使命の一つが「徳化」であることから、この度の冊封自体、大きな意味で康熙帝の撫恤政策と捉えることが可能であろう。さらに付け加えれば、それを担った汪楫自身も、後世に成る清朝の官選伝記の中で、留学生制度を復活させ琉球を徳化した人物として公に評されることになるのである。<sup>54)</sup>

提案の三つ目は、閔帝廟の創建である。

汪楫と林麟焄は、孔子廟が存在するのに対し、中国では一般的に存在する閔帝廟が琉球に存在しな

いことを非常に残念に感じた。そこで彼らは、琉球に自らの銀を与えてまでして、閔帝廟を造らせようとしたのである。琉球側もこれに従い、中国へ行った使者に閔帝の像を持ち帰らせ、康熙二十九年（一六九〇年）に天妃宮の中に一壇を築き、そこに像を安置して「閔帝廟」としたのである。<sup>55</sup>この天妃宮内に閔帝を安置し、「閔帝廟」とすることからわかるように、この時、閔帝の廟というものが建てられることはなかった。そしてその後も、閔帝像は天妃宮から天尊廟に移されるも、依然としてそこが「閔帝廟」とされ今日に至っている。つまり現在に至るまで、閔帝像は天妃宮や天尊廟に安置され「閔帝廟」とされるも、一度として閔帝の独立した廟が琉球において創建されたことは無いのである。

廟が建てられなかった具体的な理由は不明であるが、康熙三十年頃に中国から帰国した琉球の使者はいずれも、福州にて駐在勤務する在船都通事の役職についている人物が多いことから、<sup>56</sup>像自体も彼らが伝え、かつ独立した廟を建てずに他の廟に安置するという福州の風習を真似たものではないかと考えられる。

一方、汪楫は銀を与えて閔帝廟を作らせようとしたのであるが、閔帝廟や銀を与えた記述は、中国側の史料には一切登場しない。本来ならば銀を与えるという行為は、復命書である「冊封使録」に記載すべき事柄であるのだが、汪楫の「冊封使録」には記載がない。また、筆者の管見の限りにおいてではあるが、現代に残されている公史料の中にもこの記述が見出せないため、<sup>57</sup>現段階では記述が存在しないと判断して良いであろう。では、汪楫が中国側の史料に記載を残さなかったのだとすれば、そ

れはなぜであろうか。

推論の域を出るものではないが、考えられるのは、銀を与えるという行為を汪楫が「公務」と見なさなかつたから、すなわち、中国王朝の使者という役目を越えて、汪楫が独断で行なった行為であるからである。汪楫がこのような行為に及んだのは、彼が帰国の途に着く頃には、康熙帝の徳化という役目を越えて、彼自身も琉球のことを好意的に感じるようになっていたからなのかもしれない。

汪楫の思惑についてはともあれ、ここまで三つの提案を見てきた。これら三つの提案について言えることは、「他の朝貢国の模範」となる琉球を、さらに徳化するために行なわれた提案は、琉球側に容易に受け入れられたということである。逆に言えば、琉球側はそれまで行なつて来た「中国化」を中国側に見せることで、中国側に好印象を植え付け、かつ提案にうまく乗じ、さらなる「中国化」の推進や清朝の徳化を意識的に被るといふ顔を見せることで、対中関係をより良好なものにし、さらに旧例復活という思わぬ恩恵をも受けることになつたのである。

#### 四 程順則と明倫堂

##### (1) 「廟学記略」と「琉球国創建関帝廟記」

琉球は、自らの「中国化」と清朝の徳化を清朝側に見せることで、清朝と良好な関係を築くことに

成功した。この後、琉球はこの良好な関係を維持すべく、数々の政策を行なっていく。その政策を行なう上で、重要な役目を担った人物の一人が、程順則である。

はじめにでもふれたように、程順則は、儒学を振興した教育者や道徳家であるというイメージが一般的であるが、より具体的には、彼はどのような形で琉球の中国との関係を維持し、かつ儒学を振興する人物となつていったのだろうか。

程順則は、孔子廟や「閔帝廟」について自著に記している。これらを見ることで、彼の孔子廟や「閔帝廟」についての考えを窺うことができる。そこでまずは、孔子廟について彼が著した「廟学記略」から見ていくことにしよう。

康熙十一年に立廟を請願し、王はそれ許可した。廻り歩いて占いをし、場所を久米村に決め、康熙十三年に至つて職人に工事をさせ、まもなく廟が完成した。翌年になつて、廟に塑像を安置した。その翌年に春秋の釋菜礼を行なつた。新しく建物が壮麗で、祭祀を慎しく行なうさまは、あたかも闕里の孔子廟に参拝して、自らがその盛んなさまを目の当りにするかのようである。孔子廟の創始の功は、誠に永久に排されることがないのだ。続いて康熙二十二年には冊封を受け、正使である翰林院檢討の汪公、副使である内閣中書舎人の林公は、「中山世土」の四大字を書いた扁額を持ち来たりて、王に賜与した。さらに、上奏して陪臣の子弟が国子監に入学して読書させることの許可を求めた。これらはすべて（琉球にとって）異例の待遇である。これらは皆、立廟し

て以後の事であるから、聖教を崇べば、皇帝の徳にあつた時、その微に至るまでを理解できるよ  
うになるのだ。<sup>(58)</sup>

ここから、孔子廟創建の経緯と完成を賞賛すると同時に、それを冊封使による「中山世土」の扁額賜  
与や官生の復活と結びつけていること、さらにはこれらの事柄を清朝の徳化として評価し、賞賛を加  
えていることがわかるであろう。つまり、この「廟学記略」では、本来清朝の徳化とは直接関係のな  
い孔子廟創建が、冊封使による「徳化」までの一連の筋書きとして出来上がっているのである。

「程順則は、このような「事実」を自著に記し、それでもつて自ら子弟を教育することで、これらの  
思想を広く知らしめたと考えられる。

同時に彼は、関帝についても「琉球国創建関帝廟記」という自著の中で記している。

私が中国に行った時、行った場所の神祠で、生まれ故郷で祭祀を行い、子孫を絶やさない者が甚  
だ多いということを目の当たりにした。取り分け関帝廟の姿は、清く肅しく莊嚴であつた。上は  
公卿や大夫から、下は百姓の子供達まで、尊敬の念を起さず拝礼して退くことを恐れない者は  
いなかった。関帝は何ゆえ人々からこのように崇拜されるようになったのだろうか。(中略)こ  
こに、琉球国ではすでに孔子廟が創建されている。しかし、関帝に関してはその祭祀を欠いている。  
だがどうして、関帝の声明は海洋に阻まれて中国に溢れ、海外に遠播しないのであろうか。私は  
そうではないと思う。癸亥の歳、今上皇帝が君臨して二十二年、冊封正使である翰林院檢討の汪

公と副使である内閣中書舎人の林公が、琉球国には閔帝の為に立廟する意思があるのを知つて五十金（銀の誤りか？）を我々に与え（廟の創建を）提唱した。こうして国王は喜び、立像して祀つたのである。こうして祭祀をするようになり、閔帝に靈験が備つたのだ。しかしこのことを疑つて、「琉球国は長年にわたつて恭順を心掛け戦乱もおこらず、これらが変わることはなかつた。それなのに閔帝を祀ろうとする気がなぜ生まれるのか。」と思う者がいたとしたら、それは閔帝の正気を知らないのである。天地を満たすことができるのは閔帝の大義である。古今の有能なる者を一貫して、後の臣子となる者にわたるまで君と父がいることを知らないものがないのだ。どうして帝の感化力が満たされやすい所とそうでない所があるうか。もしただ閔帝の武功を論じるならば、古今の戦に勝利し、万人の敵と称されるであろう。そもそもどうして人がいなくて何ゆえ帝の声明が今になるまで存在するのであるうか。だとすれば、すなわち私の立廟の意志もとより今にあるのであつて、その時にあるのではない。<sup>59</sup>

これによると、程順則は自身の中国での体験から、中国においていかに閔帝が崇拜されているかを説明し、琉球では閔帝が、冊封使の提案によつて祀られるようになったと指摘している。さらに閔帝を琉球で祀るのは、中国でいう武神としてではなく、「義」を尊ぶために祀ると説いている。

このように、閔帝についても孔子廟と同様に、それが存在するのは、ひとえに清朝の徳化の結果であると結論している。「廟学記略」と同様に、程順則はこのような思想を、儒学の振興という形で久

米村の子弟を中心に教え広めて「教化」していき、また清朝側に対しても、これらの思想や儒学の振興の様を見せることで徳化をアピールし、良好な関係を維持していくのである。

## (2) 明倫堂

さらに程順則は、自身による琉球の「中国化」観を示した史料も残している。それが、一七七八年に創建される明倫堂の創建に関する請願である。この文章の前半は、前述した汪楫と林麟焜の各々が記した「琉球国新建至聖廟記」を候文で記し、後半では程順則他、当時の三司官たちによるコメントを記した「覚」という形で記録されている<sup>60</sup>。程順則の「中国化」観が窺えるのは、後半の「覚」の部分で、そこには次のような彼のコメントがある。

汪楫・林麟焜の二人の冊封使様が、孔子廟に関する文章を共に書かれました。よって冊封使様が申された通り、聖廟に学校が無ければ中国のやり方と異なってしまう、孔子廟を建立された意味が無くなってしまう。先年銀を差し上げたにも関わらず、このまま（学校の）普請を仰せ付けられなければ、次回の冊封使渡来の時に、琉球は聖像を拝むに過ぎず学校で教育することは無いと、（冊封使によって）記録に書かれてしまえば、末代に到るまで（中国の琉球に対する）印象が悪くなってしまうでしょう。たとえ、冊封使渡来後にいかなる形で普請をされようとも、最早普請する甲斐がないと存じますので、次回の冊封使の渡来までに、それなりの（学校の）普請

を行なうよう仰せ下さりますよう宜しくお願い申し上げます。<sup>6)</sup>

この記述の特筆すべき点は、次の二点を明言していることであろう。すなわち一つに、孔子廟は初めから中国を意識して創建された。言い換えれば、初めから琉球の「中国化」を目論んで創建された点。二つに、孔子廟の隣に学校（明倫堂）を建て、中国と同じ形にしなければ意味が無い。同時に、中国王朝の使者である冊封使にこれらを見せることができなければやはり意味が無いということを、程順則自身がはっきりと述べている点である。つまり程順則にとつて明倫堂の創建は、琉球の「中国化」を目的に建てられる以外の何物でもなかったということはこの史料は物語っているのである。

### おわりに

以上、本稿では久米村の孔子廟創建について考察してきた。本稿の要点をまとめると、おおよそ次のように言えるだろう。

琉球初の孔子廟は、中国における明清交替の動乱を直に経験した、金正春という人物によつて創建が請願された。請願当時、琉球は羽地朝秀の改革のただ中であつたが、改革による経済の回復が顕著になつてきたということや、薩摩による琉球への関与を前提とした国づくりを指す必要から、創建がなされたのである。

一方、中国で新たに誕生した清朝では、次期の冊封使派遣について議論がされていたが、康熙帝による琉球への好印象や、「徳化」を目的とした冊封使の派遣を強く望む姿勢が幸いし、冊封使の派遣が決定した。

琉球に到着した冊封使一行は、清代に入ってから琉球人が感銘を受けて創建した、孔子廟という「中国文化」を目の当たりにし、琉球は他の朝貢国の模範になるという好印象を持ち、琉球側に官生復活や関帝廟創建などの提案を持ちかけ、琉球側もこれらの提案を受け入れた。琉球はその後、程順則などの指導の下でさらなる「中国化」を進め、清朝との良好な関係を保持していくのである。

【註】

- (1) 一六七四年に廟完成。その翌年聖像が完成し工事全竣。一六七六年正月に告成。『琉球國舊記』二八―二九頁「八〇 至聖廟（在唐榮東）」『蔡氏家譜』「九世諱國器高良親方」（『那覇市史』資料篇第一卷六 家譜資料二（下）二九九頁に収録）
- (2) 国学に隣接していた。一八三七年に尚育王の命により創建。「一七五一 三年丁酉首里新建文廟」『球陽』原文編 角川書店 一九七四年 四五六頁
- (3) 真境名安興「琉球の五偉人」『真境名安興全集』第四卷 第一書房 一九九三年（初出は、小沢書店 一九一六年）

- (4) 真柴田義見『名護親方程順則評伝』沖縄印刷団地出版部 一九八二年
- (5) グレゴリー・スミッツ「琉球王国に於ける儒学の成立―その特徴と歴史的事情―」『斯文』一〇二号 斯文会 一九九四年
- (6) 豊見山和行「祭天儀礼と宗廟祭祀からみた琉球の王権儀礼」『琉球王国の外交と王権』吉川弘文館 二〇〇四年
- (7) 羽地朝秀の改革期とは、羽地朝秀が摂政に就任した一六六六年から、彼が退任した一六七三年までの七年間を指す。
- (8) 高良倉吉「向象賢の論理」『新琉球史 近世編(上)』琉球新報社 一九八九年
- (9) 康熙十年辛亥、以新建聖廟、請國王。於是允其請、卜地於泉崎橋頭、鼎建聖廟。『金氏家譜』二八世紫金大夫諱正春(『那覇市史』資料篇第一卷六 家譜資料二(下) 九四一頁に収録、なお本稿の史料の句読点は筆者による。)
- (10) 萬曆三十八年庚戌（一六九〇）總理唐榮司蔡堅喜友名親方、奉使入貢、登孔子廟見車服禮器、而心向往之。於是、圖聖像以歸。每當春秋二仲上丁之期、約唐榮士大夫輪流家而祀之。由來久矣。然未遑立廟。『金氏家譜』一八世紫金大夫諱正春
- (11) 久米村人とは、外交に関する職能を持ち、それを王府に認められ、久米村に編入された人々のことである。彼等は王府に能力を買われることで、久米村独自の役職に就くことができた。これについて詳しくは、田名真之「近世久米村の成立と展開」『新琉球史 近世編(上)』を参照。

- (12) 隆武元年次年丙戌（中略）國王遣正春等、入慶賀、公事已竣。『金氏家譜』「八世紫金大夫諱正春」
- (13) 拜謁貝勒將軍、即承赴京朝覲之諭。至次年丁亥四月七日、貝勒將軍率同毛泰久、金正春、王明佐等三員前赴京師、具其情由。『金氏家譜』「八世紫金大夫諱正春」
- (14) 於是謝必振捧勅書、於六月同球使京都起身。九月到浦城縣、聞山賊蜂起擧力阻歸路。『金氏家譜』「八世紫金大夫諱正春」
- (15) 纔到福州。己丑年六月初七日、搭謝必振船開洋。至半洋遭大風。十五日飄至日本屬地山川其夜薩州。『金氏家譜』「八世紫金大夫諱正春」
- (16) 正春與柳枝蕃二人、赴江戶悉奏中國革鼎之事。『金氏家譜』「八世紫金大夫諱正春」
- (17) 順治十一年甲午九月十九日。拜授總理唐榮司（勤職貳拾年）。（中略）於治公之餘、常講經學、教育人才。因此唐榮後生之徒、經學日進、人才蕃衍。雖海東之國、禮樂文章、殆與中華無異矣。『金氏家譜』「八世紫金大夫諱正春」
- (18) 創建に関わつた人物は、金正春の『家譜』にある金正華・蔡国器の他に、風水によつて創建場所を泉崎に選定した周国俊や、程順則の父親である程泰祚等が挙げられる。彼らの共通点は、創建以前に、金正春等と共に中国大陸に渡つた経験があるということである。中国での役職については、北京へ行く使者の他に存留通事など福州に留まる役職の者もいるが、明清交替期の中国を知っているという点では、その「経験」に相違はなからう。

- (19) その後、康熙十五年（一六七六年）に四配の像が完成し、釋奠の祭礼が整備される。
- (20) 比較的近年のもので、かつ数名の研究者が羽地朝秀の改革をそれぞれの視点で言及しているものに『新琉球史 近世編（上）』があげられる。また、改革と薩摩の政策を関連付けて論じた、上原兼善「琉球国における寛文改革の意義―いわゆる羽地「仕置」の性格をめぐって―」『西日本史学会宮崎支部報』一九八九年のよう  
な独自の視点での論稿も存在する。
- (21) 高良倉吉「向象賢の論理」、同「琉球王国の展開・自己変革の思念、「伝統」形成の背景」、『岩波講座世界歴史一三 東アジア・東南アジア伝統社会の形成』岩波書店 一九九八年
- (22) 色々独吟味二而仕置相改候付、二三年内二百姓緩々で罷成候。我非老人之私言候。諸人所見知候。前々で八各別之儀候事。「羽地仕置」（『沖縄県史料』前近代一 首里王府仕置四六頁に収録。）以下全て、意訳の括弧は筆者の挿入。
- (23) 今度於大和仕明御赦免可被下由、訴訟申上候処、無異儀相達御免被下候（後略）。「羽地仕置」三〇頁
- (24) 高良倉吉氏によると、この頃から推進された仕明は、耕地面積の拡大や収穫高の増加という点では著しい成果を収めた。しかし、その反動による乱開発や林野面積の減少などが表面化したため、一六八九年に王府によつて規制を加えられた。高良倉吉「琉球王国の展開・自己変革の思念、「伝統」形成の背景」九一―九二頁
- (25) 至於康熙十年辛亥、總理唐榮司紫金大夫金正春城間親方、始議創建聖廟、請攝政向氏羽地王子朝秀。『程氏家譜』

- 〔六世小宗都通事諱泰祚〕(『那覇市史』資料篇第一卷六 家譜資料二(下) 五四四頁に収録)
- (26) 真境名安興「琉球の五偉人」二四頁(句読点は筆者が挿入)(出典は(注3)と同様)
- (27) 史料中の「勸進」という語については、士族達の「淨財」なのか、王府が政策として寄付を募ったものなのか、意見の分かれるところであろう。ただ、本稿での筆者の主要な関心は、なぜこの時期に孔子廟を創建する必要があるのかということである。よって本稿では、ひとまず後者ではないかというふうな「仮定」したい。もちろん、前者の意見は、当時の琉球経済の問題に留まらず、当時の人々の「中国文化」におけるスタンズやメンタリテイの問題とも関係することである。この点については、筆者としてもさらに研究を進めていく必要があると考えている。
- (28) 高良倉吉「琉球王国の展開・自己変革の思念、「伝統」形成の背景」七八頁
- (29) 豊見山和行「冊封関係からみた近世琉球の外交と社会」『琉球王国の外交と王権』吉川弘文館 二〇〇四年
- (30) 鹿兒嶋之應御例格、(中略)、國法被相定、國之御礼法被相定、御政道之根元被相定、(後略)。『羽地家々之傳物語』  
沖縄文化研究所蔵
- (31) 諸説については、渡辺美季「清に対する琉日関係の隠蔽・『旅行心得之条々』の分析を中心に」『アジア民衆史研究』第十集 二〇〇五年を参照。
- (32) 紙屋敦之氏によると、一六五五年に清朝の冊封使来琉予定の報を聞いた幕府は、もし清朝から何か要求されれば、琉球はそれに従うようにという命を下し、これによって琉球支配における清朝との軍事的衝突を避け

- たのだとする。同時に、幕府はこの時、琉球を直接支配するのではなく、治めずして治めるという風の方針を転換したという。紙屋敦之「幕藩制国家の成立と東アジア」『幕藩制国家の琉球支配』校倉書房 一九九〇年
- (33) トカラ交通のレトリックについては、(注31) 渡辺論文を参照。また、紙屋敦之「琉球の中国への進貢と対日関係の隠蔽」『アジア地域文化学叢書Ⅱ 早稲田大学アジア地域文化エンハンシング研究センター 二〇〇六年でも、これらについての論点が示されている。
- (34) 冊封使派遣決定までの議論については、曾煥棋「使琉球冊封正使汪楫・副使林麟焜について」『清代使琉球冊封使の研究』榕樹書林 二〇〇五年、拙稿「清代冊封使の派遣実施の議論と冊封使の請願・清朝第二回目の冊封琉球使について」 大正大学大学院研究論集 第三十二号 二〇〇八年を参照。また、汪楫と林麟焜についての専論として、謝必震「汪楫使琉球及其著述略論」『淡江史学』一九九三年が存在する。
- (35) 上諭曰「琉球世爲外臣、今奏請嗣爵。故特遣使冊封、朕書「中山世土」四大字、命使臣賚賜。(後略)」「康熙二十一年壬戌八月」『康熙起居注』第二冊 中華書局編 一九八四年 八八七頁 また『使琉球雜錄』(原田禹雄『汪楫 冊封琉球使錄三篇』榕樹書林 一九九七年に収録)には、琉球を「徳化」のために扁額を賜与するという記述が存在する。
- (36) 康熙帝による清朝の対琉球政策については、謝必震「康熙與琉球」『第八回琉中歴史関係国際学術会議論文集』二〇〇一年を参照。

- (37) 一六八一年に三藩の乱を平定し、その後一六八三年に台湾鄭氏を降伏させた。冊封使は、鄭氏の降伏を待つて来琉したのである。
- (38) 当初は冊封使を派遣しない方針であった清朝政府に、琉球側は、三藩の一つである靖南王の要請拒否を理由に、再三冊封使の来琉を懇願する。渡辺美季「琉球から見た清朝・明清交替、三藩の乱、そして太平天国の乱」『清朝とは何か』別冊 環⑥ 藤原書店 二〇〇九年
- (39) 登岸入館之次日、例當行香。通事以天妃宮・至聖廟告。『使琉球雜錄』卷一 使事 十三葉
- (40) 攷之、前録未聞國中祀孔子。慮別有所謂至聖者。將出、前導者請曰「宮與廟孰先。」答曰「先廟。」入廟（中略）審視。然後、下階肅拜如禮。『使琉球雜錄』卷一 使事 十四葉
- (41) 若吾夫子之廟、稽諸往載、琉球未聞有祀者。於是進諸大夫而詢之、咸跪而言、曰「聖廟之建、肇自康熙八年。陪臣入貢中國、見夫學宮巍峨布滿天下、瞻慕感動、歸而陳諸王前、度材命工、厥廟斯興。林麟焄「琉球國新建至聖廟記」（塚田清策『琉球國碑文記の定本作成の研究』啓学出版 一九七〇年 一四三頁）三八 琉球國新建至聖廟記」に収録）また、周煌『琉球國志略』卷十五「藝文」にも同記述を収録。
- (42) 康熙八年の入貢では、清代になってから初めて、会同館での生糸交易を認められた。（康熙九年（中略）清朝許球人交易者、自此始也。『蔡氏家譜』「九世諱國器高良親方」『那霸市史』資料篇第一卷六 家譜資料二（上）二九八頁に収録）
- (43) この絵については、最近描かれたものではないという汪楫の口述から、万曆三十八年に蔡堅が持ち帰った絵

と思われるが、実態については不明である。また、この絵がいつから王の間にかけていたのか、冊封使に見せるために掛けられていたのか等も推測の域を出ない。

(44) 遂入王宮（中略）、上奉御賜榜書中山世土四大字、下設一榻王位也。中懸孔子像、絹色蒼黝、非近代物。『琉球雜錄』卷二 疆域 十八葉

(45) 汪楫と林麟焜は、それぞれが同タイトルで、孔子廟に関する文章を琉球に残した。それが「琉球國新建至聖廟記」である。タイトルは同じであるが、記述内容はそれぞれ微妙に異なる。なお、それぞれは塚田清策『琉球國碑文記の定本作成の研究』啓学出版 一九七〇年に収録されている。

(46) (注41) 参照。

(47) 自州縣皆得建學、而吾孔子之廟祀始遍天下。然學以外無所謂廟也。(中略) 孔子之祀、行於廟、而備於學、嗚呼至矣。「附臣楫纂琉球國新建至聖廟記」『使琉球雜錄』卷二 九葉

(48) 今天子重道崇儒、常以興教化、勤學校、考吏之殿最。於是職方版圖、莫不以修學新孔子廟爲務。「附臣楫纂琉球國新建至聖廟記」『使琉球雜錄』卷二 九葉

(49) 而琉球國遠在海東萬里外、亦建至聖廟於國門之久米村。蓋創始於康熙之十二年、立國以來、所未有也。夫琉球自隋唐以後、國名始見於史。又千餘年、至明初始修職貢通中國。『使琉球雜錄』卷二 九・十葉、さらに林麟焜「琉球國新建至聖廟記」には、春秋後、中國崇祀聖人、垂三千年、而外夷無聞。今琉球一旦先之。と  
いう記述も存在する。

- (50) 皇清受命、首列藩封歷三十年、而祀聖人於今天子踐祚十年之後。謂非皇帝盛德大業度越千古有以漸被之而然歟。『使琉球雜録』卷一 十葉
- (51) 今日者、廟既成矣。因廟而擴之爲學、則費不繁而制大備。『使琉球雜録』卷一 十一葉
- (52) 因廟而擴之爲學、擇國中敦行誼工文章者、爲之長、俾以時訓督其子弟修舉釋菜釋奠之禮。國之中、或難其選則直疏其事而請於朝乞如往昔教育故事。『使琉球雜録』卷一 十一葉
- (53) 上江洲安亨「清朝初期における琉球国の官生派遣の復活について」『沖繩文化研究二四』一九九八年
- (54) 碩言語、尤得要領、琉球君臣相與感動懾服、請以子弟入太學。蓋通道以來未有也。『國朝耆獻類徵』卷百六十二 疆臣十四 六葉「汪楫」(二卷 江蘇廣陵古籍刻印社 一九九〇年二二六頁に収録)
- (55) 康熙二十二年癸亥、尚貞王、受册封時、欽差汪林公、徧謁寺院・神廟、獨惜斯廟之未建。遂能許愿、各發銀兩、因囑唐榮官員云。迄我旋後、請代建廟。是故、紫金大夫蔡鐸志多伯親方、題請、王允其請。康熙二十九年庚午、乃當入貢之期、便托使者、能塑關帝、及關平・周倉、三位聖像。越明年、奉此而旋。故于上天妃廟内、別築一壇、奉安其像、永爲護國伏魔之神焉。『琉球國舊記』「關帝王廟(在上天妃廟内)」(『琉球史料叢書三』東京美術 一九七二年 二九頁に収録)
- (56) 康熙二十九年に入貢し、翌年帰国した使者は、鄭職良など、みな当時在船都通事以下の役職である。
- (57) 汪楫に関する官選の伝記、後の冊封使の「使録」、また当時の檔案史料に關しては、関帝廟と汪楫を結びつける記述を見出すことができない。

- (58) 於康熙十一年請立廟、王允其議。廻下地久米村、至康熙十三年令匠氏庀材、不日成之。越明年、塑像於廟。又明年行春秋釋菜禮。既新輪奐復肅俎豆、恍如登闕里之堂躬逢其盛也。創始之功、洵不祧矣。續於康熙二十二年、蒙冊封、正使翰林院檢討汪公、副使內閣中書舍人林公、齎到御書中山世士四大字、賜王。復奏允陪臣子弟入國子監讀書。均異數也。然皆立廟以後事、可知崇聖教即邀帝眷其理微矣。「廟學紀畧」(『程氏家譜』)七世隆勳紫金大夫加銜法司正卿諱順則」に収録(出典は(注25)と同様)
- (59) 予至中華見所在神祠血食鄉土者甚多。獨闕帝廟貌、清肅莊嚴。上自公卿大夫、下至健兒牧豎莫不凜然起敬、瞻禮恐後也。帝果何以得此於人哉。(中略)茲琉球國已建孔子廟。而獨於帝缺其祀典。豈帝之聲名、止洋溢於中夏而不能遠播於海外歟。予謂不然也。歲癸亥為今上御極之二十有二年、冊封正使翰林院檢討汪公諱楫、副使內閣中書舍人林公諱麟煇、知吾國有欲為帝立廟意、乃損俸五十金以爲之倡。爰我王喜為立像祀之。從此俎豆馨香、帝之靈爽實式憑焉。然或則疑之、謂琉球王位世及相傳、弗替小心恭順、兵革不興。祝帝之意果何為也者、不知帝之正氣。可以塞天地帝之大義。可以貫古今能使、後之為臣子者靡不知有君父焉。豈僅廉頑立懦、寬鄙敦薄已哉。若止論其武功則古今戰勝攻取、號稱萬人敵者。夫豈無人而何以獨帝之聲名至今存也。然則予立廟之意固在此而不在彼肯。「琉球國創建關帝廟記」(『程氏家譜』)「七世隆勳紫金大夫加銜法司正卿諱順則」収録)
- (60) この「寛」については、糸数兼治氏が「琉球における孔子祭祀の受容と学校」国立歴史民俗博物館研究報告第一〇六集 二〇〇三年の中で言及している。

(61)

一右両勅使様より孔子廟之記、具二被書置候。然者勅使様被申置候通、聖廟ニ学校所無之候得者中国之法式致相迄、<sup>漢方</sup>却而孔子廟御建立為被遊詮無御座候付、先年料銀差上置候処、今迄御普請不被仰付候得者、自然勅使御渡来之時、琉球之儀者聖像計御仕立拝候迄ニ而学校之教者無之由、記載せ委御仕付被成候ハ、未代ニ到迄御外聞向不可然候。縱令冠船以後ニ到り何様之御普請被遊候共、無<sup>甲方</sup>早斐儀之奉存候条、冠船内ニ相応之御普請被仰付被下候様、宜御取成御披露上候、以上。西四月十九日 大嶺親雲上 松堂親雲上 古波蔵親方 「二八 覚」 『那覇市史』資料篇第一卷一一 琉球資料(下) 一九九一年 四三一―四三二頁に収録)